絵本 琴の調べに乗せ

釜石・読み聞かせ会「さくら」

被災地の子どもたちが自然な笑顔を取り戻してほしい―。釜石市甲子町で文化琴教室を開いている中村ひろみさん(47)は、2年前の東日本大震災で大変な経験をしましたが、琴と読み聞かせを組み合わせたユニークな会「さくら」の活動を再開し、子どもたちと触れ合いの輪を広げています。

震災を乗り越え活動

大人も子どもも癒やす

同市甲子町の甲子子育て支援センターが活動拠点。この日は、親子連れ約20人が参加しました。

最初に、文化琴で「さくらさくら」を演奏。メンバーの大久保清美さん(48)の絵本の読み聞かせや、琴の調べに合わせた手遊びを楽しんだら、最後は鹿内美香さん(39)ら同センターの保育士と一緒に「3びきのこぶた」を楽しい劇で披露し、子どもたちは大喜びでした。

中村さんは2003年、長女が甲子小に入学したのをきっかけにボランティア「甲子っこ　お話どんどこ」に参加しました。

「学校の枠を超えて子どもたちに読書の喜びを伝えたい」と2010年、特技の琴と読み聞かせをミックスした「さくら」を結成。

「活動が軌道に乗ってきたと思ったら震災が起きました」と振り返ります。

11年3月11日、中村さんは釜石市内を運転していて、渋滞に巻き込まれました。津波が来た時は大渡橋の真ん中にいました。どんどん迫る津波。中村さんは必死で橋の欄干にしがみついて、命拾いをしました。

しばらくは琴を手に取る気にすらなれなかった中村さんでしたが、少し落ち着いてきた同年5月、一人になった時、ちょっとだけ琴を奏でてみました。その音に「元気になれます。

琴の演奏を交えながら手遊びを披露する中村ひろみさん（左）

子どもたちに絵本を読み聞かせる大久保清美さん

～～～～～～～～～～

なくちゃ」と決意しました。

そして、同月下旬から会の活動を再開。琴の温かな調べが、子どもたちだけではなく、大人の心も癒やし、涙を浮かべるお年寄りもいました。活動は、中村さん自身の元気を回復することでもありました。

「震災からしばらくは、まだ子どもたちはおびえていて、本来の明るさがなかったです。最近は自然な笑顔になってきたように思います。これからも息長く活動していきたいです」と張り切っています。

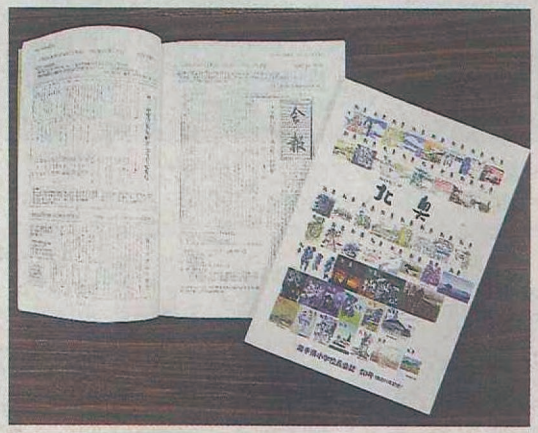
こどもパークニュース

半世紀の活動を記念し会誌発刊

県小学校長会

県小学校長会（会長・横沢幹雄仁王小校長）は、同会の設立50年を記念した会誌「北奥50号」を発刊しました。

「50年の歩み～いま過去と未来を結ぶ～」をテーマに、半世紀にわたる同会の活動を記録。学校経営の充実化や復興へ向けて校長間の絆を強めるとともに、これまでの支援に対する感謝を示すた



県小学校長会設立50年の歴史をまとめ、未来へ提言する「北奥50号」